

発掘調査から出土する漁具に釣り針があります。現在の釣り針は金属、それも鉄製がほとんどです。日本人が鉄の道具を使い始めたのは弥生時代以降とされています。それでは、それ以前に人間は釣りを知らなかったのでしょうか？そんなことはありません。米原市入江内湖遺跡や、大津市滋賀里遺跡からは、鉄が使われる前の縄文時代の釣り針が出土しています。この釣り針の素材は何でしょうか？それは、動物の骨や、鹿の角を材料につくられたものでした。どうやってつくったのでしょうか？ 昨年(2010年)、私たちは、

子供たちと一緒に、鹿の角から釣り針をつくる実験をしました。以下は、その時の様子です。

まず、鹿の角を手に入れます。春先に山を歩くと鹿の角を拾うことができます(拾った角より、狩猟で獲った鹿の角の方が堅くて、細工には適しています)。

角を玉切りにします。昔の人は、石を薄く割った道具で気長に切っていたと思いますが、現代人はノコギリで切りました。次に、玉切りの角をスライスして、角の板をつくります。この工程もズルをして、糸鋸で

角を玉切りにします。昔の人は、石を薄く割った道具で気長に切っていたと思いますが、現代人はノコギリで切りました。次に、玉切りの角をスライスして、角の板をつくります。この工程もズルをして、糸鋸で

とろろが、水に浸して柔らかくなるのはよいのです。かくなるのはよいのです。が、釣り針は水中で使います。柔らかい釣り針は使えません。そこで、2つの方法で釣り針を強化してみます。1つの方法は、蜜蝋をしみこませて、水を擦りかしてしまふ方法です。もう一つは、木灰を溶かした強力なアルカリ液で、煮縮める方法です。試してみたいところ、両方ともそれなりと効果があることがわかりました。

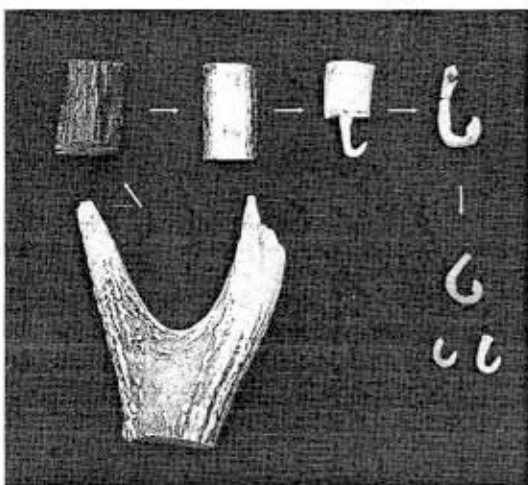
鹿角針で魚を釣ってみたい

切り出しました。次に、角の板に、大まかな釣り針の形を描いて、切り抜きまし

た。これもズルをして、カッターナイフで削り出そうとしたのですが、堅くて削れません。そこで、考え、板を水に浸けてみました。そうしたら、表面がふやけて、柔らかくなり、ナイフで楽々削れるようになりました。こうして、表面をふやかしながら削り、針の形を整えていきました。

さて、この角釣り針で本当に魚が釣れるのでしょうか？結論から書きますと、釣れました。ただし、すごく苦戦しました。針先は鋭い方がよいと考え、ヘラブナ釣りの針のような、針先のカエリを落としたり針(スレバリ)にしたのですが、これだと、餌のミミズが暴れると、魚が食う前に外れ

縄文の漁具



鹿の角を使った釣り針の製作。削りとっていきくと、右下のような形になる

と、餌のミミズが暴れると、魚が食う前に外れ

てしまふのです。カエリには、餌留めの機能もあったのです。それで、ミミズを縫いつけるように針に付け、やっと釣り上げたのがブルーギル一匹だけでした。意外に効率の良かった針がありました。それは直針つまり、小さな棒の両先端を尖らせた真つすな針です。この針にミミズを釣り糸ごと通して、糸と針が真つすな状態で水に沈めると魚は針ごと飲み込みます。十分飲み込ませてから、強く合わせると、針が魚の中で糸にT字状になり、かかるのです。ただし、釣れたのは、ブルーギルです。今回の実験で、鹿角針でも魚が釣れることは、わかりました。でも釣れる魚はすべて、ブルーギルばかりでした。少し悲しい結果です。

(滋賀県立安土城考古博物館 大沼芳幸)